

# 越中万葉



万葉集を編纂した大伴家持は、天平十八年（七四六年）から五年間、越中の国守を務めました。当時の越中は、家持が「しなごかる越」と詠んだように、奈良の都から遠く離れた鄙の地。都とは異なる風土の中で家持は多くの歌を詠みました。万葉集に残る家持の歌四七三首のうち、五年間の在任中に詠まれたものは実に二二三首にのぼります。



二上山の大伴家持像

この写真は著作権の関係で表示できません。  
写真は冊子でごらんになることができます。  
担当の営業までお問い合わせください。

なでしこが

花見るといふ

娘子らが

笑まひのほひ

思ほゆるかも

揮毫 中尾 哲雄

なでしこが 花見ることに 娘子らが  
笑まひのほひ 思ほゆるかも

大伴家持（巻十八・四二四）

【歌意】なでしこの花を見るたびに、あの少女の  
笑顔のあでやかさが思い出されてならない。

## 《解説》

この歌は天平感宝元年（749年）5月26日に、大伴家持が詠んだものです。太陽暦では7月ですが、歌われている「なでしこ」は、おみなえしや萩などにも、秋の七草のひとつです。  
「大君の 遠の朝廷と 任きたまふ（中略）天さがる 鄙に「日もあ  
るべくもあれや」巻十八・四二二三と、都から遠く離れた越中において、  
都を思つて詠んだ長歌の反歌として詠まれました。  
都に思いを馳せて、庭に咲いたなでしこの可憐な花を見て、必然的に  
浮かんだのが都に残した妻である坂上大嬢（さかのうえのおおいらつ  
めまたは おおおとめ）でした。  
家持は、天平五年（733年）にも、坂上大嬢に、「わが屋外に 蒔き  
しなでしこ いつしかも 花に咲きなむ 比（つ）見む」（巻八・四四  
八）という歌を贈っています。  
なお、「娘子ら」の「ら」は複数形ではなく、親しみの表現です。それに  
しても、におい立つような美しい笑顔は、なでしこの可憐さにもまして  
素敵なものだったのでしよう。